

解説

関口英子

ジャンニ・ロダーリ（一九二〇～八〇年）は、イタリアを代表する児童文学作家であり、詩人、ジャーナリスト、教育者としても知られている。

ファンタジーを、「この世に生まれたすべての人びとの精神や人格をつくりあげている特質」と捉え、それを法則化することによって、誰もが物語を創る楽しさを味わえるようにした画期的な試み『ファンタジーの文法』は、日本でもご存じの方が多いのではないだろうか。

イタリアでは、もはや児童文学の枠組みを越え、二十世紀を代表する作家の一人として、イタリア文学史の流れのなかに位置づけられている。「古典」という言葉が、特定の文化を象徴するものゝ意味するとしたら、今やロダーリの作品は、児童文学の歴史においてだけでなく、二十世紀イタリアの文学や教育という文化における「古典」であることは、否めない事実である」（ピーノ・ボエーロ）。

いずれにしても、ロダリーが、子どもから大人までイタリア人にもっとも広く名を知られ、家庭や学校で親しまれている作家であることは間違いない。なにより、子どもたちの想像力を大切にし、まわりを取りまく世界を見つめるさいの心の拠りどころになるようにと、教育の場での活動をつづけたロダリーが、イタリアの学校のあり方に与えた影響は、絶大である。

「ロダリーほど愉快で、人の心を包みこみ、明瞭で、揺らぐことのないユーモアの感覚を持った作家はほかにいない」。ロダリーと同じ時期に活躍し、彼と同様、創作のひとつの要素として民話を重視、採録などにも携わったイタリアの作家イタロ・カルヴィーノは、ロダリーをこのように評している。

しかしながら日本では、ロダリーという作家の全体像は、あまり知られていない。『チポリーノの冒険』をはじめ、子ども向けのおもだった読み物こそ邦訳されているものの、残念ながらその大半が入手不可能となっているし、本書『猫とともに去りぬ』をはじめ、代表的な作品でありながら、これまで一度も訳されてこなかったものも、まだまだ多い。

その理由として、ロダリーが「児童文学作家」というくくり方をされてきたため、イタリア文学の研究者から軽視されてきたこと（当初は、イタリアでも同様の傾向があった）、『ファンタジーの文法』からもうかがえるように、言葉遊びやアイロニーを得意とする彼の作風は、日本語への訳出が難しく、また日本人にはなじみにくいものであったことなどがあげられよう。

しかし、社会における閉塞感へいそくかんが強まり、弱者である子どもたちにしわ寄せがいつているとしか思えない事件があいついでいるいま、子ども一人ひとりが持つ豊かな想像力を尊重しつつ、現代社会が抱える歪んだ部分につねに目を向け、笑いというエネルギーに変えることによって、よりよい未来の構築を目指したロダリーの言葉に、耳を傾ける必要があるのではないだろうか。

*

*

*

ロダリーは、一九二〇年、ピエモンテ州（北イタリア）のオメーニャに生まれた。

父はパン焼き職人をしており、母は店の手伝いに追われていたため、幼少のころのロダリーは、一人で本を読んで過ごすことが多かったらしい。

湖からほど近い場所に家があり、緑豊かな故郷の情景は、彼の作品にもときどき顔をのぞかせている。母は厳しい女性であつたらしく、ロダリーはどちらかというとなついていたようだ。その父を、ロダリーは九歳の時に亡くしている。嵐のなか、子猫を助けるために全身ずぶ濡れになり、肺炎を起こし、命を落としたのだ。

父の死と深く結びついている猫に対し、ロダリーは特別な思い入れがあつたらしく、本書の表題となつている短編「猫とともに去りぬ」をはじめ、彼の作品には、猫がしばしば登場する。

父の死後、ロダリーは母と弟とともに、ロンバルディア州のヴァレーゼに移り住む。ヴァレーゼの師範学校に通いながら、バイオリンを習い、友人とトリオを組んでバンド活動をするなど、音楽にのめりこんだ。公園や居酒屋をまわり、セレナーデを奏でたりもしていたらしい。これが、ロダリーにとって最初の民衆文化との出会いとなる。このころから、思想や政治にも関心を持ちはじめ、レーニンやトロッキー、スターリンに傾倒し、ファシズムやエチオピア戦争を批判する文章を書き始めた。

三七年に師範学校を卒業すると、臨時教員として小学校で教えながら、ミラノのカトリック大学の外国語学部に通ったが、卒業はしていない。四〇年、イタリアが第二次世界大戦に参戦、ロダリーは四三年に、レジスタンス運動に加わる。四四年には、非合法下にあったイタリア共産党に入党し、四五年にイタリアがファシズムとドイツの占領から解放されるまで、地下活動を行っていた。

戦後、ロダリーは教員をやめ、共産党員としての活動に専念する。ヴァレーゼで共産主義の機関誌「ロルディネ・ヌオーヴォ（新秩序）」の編集に二年間携わったのち、ミラノで共産党の日刊紙「ルニタ（統一）」の記者となった。このころから、同紙日曜版の子ども向けのページも担当し、物語を書くようになる。しかし、当時はまだ、ジャーナリスト活動の一環として、編集部に請われて書いていたにすぎない。

一九五〇年、イタリア共産党が青年支部を創設するのにもない、子ども向けの週刊誌「ピオニエーレ」を創刊することにした。そこで記者として抜擢されたのが、ロダリーだ。当時はまだテレビが普及しておらず、週刊誌は子どもたちにとって貴重な娯楽であった。こうして、ロダリーは児童文学や教育、児童心理学に本格的に取り組みはじめる。

ロダーリが、自分の作品をまとめて単行本として発表しはじめたのもこのころだ。五〇年、詩集『わらべ歌の本』、ついで五一年には代表作となる『チポリーノの冒険』、五四年の『青矢号のぼうけん』など、数冊が相次いで刊行されるが、いずれも共産党系の小さな出版社から出されており、読者層も限られたものだった。

ロダーリが全国的に名を知られるようになったのは、六〇年に、詩集『空と大地のわらべ歌』、六二年に『もしもし…はなしちゅう』（電話で送ったお話）などが、イタリア屈指の大手出版社であるエイナウデイ社から刊行されてからだ。

これと前後して、中産階級に広く購読者を持っていた子ども雑誌「コツリエーレ・デイ・ピッコリ」や、イタリアの銀行協会が発行し、各公立小学校を通し無料で子どもたちに配布していた冊子「ラ・ヴィア・ミリオレ」（発行部数八十万部）などでも、彼の作品が連載されるようになり、幅広い読者を得る。

それまでの作品は、実験的で政治色の濃いものもあったが、このころから角がとれ、どちらかというとしユールレアリスムの影響を感じさせる、洗練された作風となっていく。

エйнаウデイ社から刊行された作品は、いずれも高く評価され、プラート賞（『空と大地のわらべ歌』）、カステッロ賞（『ジップくん宇宙へとびだす』）、アントニオ・ルビーノ賞（『まちがいの本』）など、優れた児童文学作品に贈られる国内の賞を、あいついで受賞。ロダリーは、イタリアにおける児童文学作家としての地位を確立する。

戦前のイタリア児童文学の主流にあったのが、『クオレ』（エドモンド・デ・アミーチス著、一八八六年）に代表される、愛国心や家族愛といった価値観を誇張した作品群である。読者である子どもたちは、物語を読んで感動の涙を流すことはあっても、腹を抱えて笑うようなことはない。もちろん『ピノッキオの冒険』（カルロ・コッロイ著、一八八三年）のような、やんちゃな子どもの素顔を楽しく描いた作品もあるにはあったが、例外的な存在だった。

ロダリーが登場する以前のイタリアの学校教育で採り入れられていたのは、このようなデ・アミーチス派の物語か、あるいは聖人を主人公としたキリスト教的な価値観を教える物語ばかりで、子どもたちの実際の問題や関心からは、かけはなれた題材が多かった。

戦後、社会がめまぐるしい発展をとげ、子どもたちを取り巻く環境も大きく変化したにもかかわらず、ドイツやフランスをはじめとする他のヨーロッパ諸国とは異なり、イタリアでは変化に十分に応えられるような児童文学の担い手が、なかなか登場してこなかった。これは、イタリアで大きな影響力を持つ思想家ベネデット・クローチェが、戦前に著した大作『新たなイタリアの文学』のなかで、子どものための文学は真の文学ではあり得ないと断言したことが、長年影を落とし、児童文学をB級のものとして格付けする風潮が根強かったからだというのは、多くの研究者の指摘するところである。

国際情勢が変化した六〇年代後半は、イタリア国内でも、政治・文化・社会全般に改革を求める傾向が強くなり、六八年に頂点に達する学生運動のうねりにつながっていく。そのような社会情勢を背景に、旧態依然としていた学校教育のあり方を変えるべきだ、という論議が高まっていた。

ロダリーの作品が数々の賞を受け、児童文学作家としての地位が確立されたのは、ちょうどこのころにあたる。これまでのような上からの押し付けではなく、子どもたちの個性を伸ばすための、より自由な教材を模索していた学校にとって、彼の作品は

恰好の教材となった。

こうして、「わが国の言語学史において、ロダーリは比類なき偉大な貢献を果たした。それは、イタリアの学校において、現実主義的で、批判する力を養い、子どもたちの力を引き出す、創造的な教育をスタートさせたことだ」(T・デ・マウロ)と評されるまでになり、戦後イタリアの民主主義的教育を象徴する詩人・童話作家となる。

ロダーリが画期的だったのは、子どもたちに身近な言葉を使って、けっして教訓におちいることなく、人類愛や反差別、自由といった概念を表現したことだ。

それだけでなく、これまで児童文学で扱われることの少なかった、搾取される側にある労働者の姿や、戦争と平和に対する概念、現代社会におけるさまざまひずみな歪や問題なども題材にした。

毎日、昼間やらないといけないことがある。

身体を洗う、勉強する、遊ぶ、

おひるになったら、

テーブルのしたくをする。

夜やらないといけないことがある。

目を閉じる、眠る、

夢に見るべき夢を持ち、

耳は聞こえないようにする。

ぜったいにやってはいけないことがある。

昼間だろうが 夜だろうが、

海のうえだろうが 陸のうえだろうが。

それはたとえば、戦争。

〔覚書〕

ロダリーの作品は、ただ読むだけではなく、子どもたちの創作意欲をかきたてるという意味でも、画期的だった。

作品が教科書に採り上げられただけでなく、ロダリー自身も非常に精力的に教育に

取り組んでいる。各地の幼稚園や学校をまわったり、またラジオ番組を担当したりしながら、子どもたちや先生と直接触れ合い、一緒に物語を創るといった試みを実施した。さらに、月刊誌「保護者ジャーナル」などを通して、教育にかかわる大人たちへの貴重な提言もおこなった。

作家としての一連の活動が国際的に認められ、ロダリーは一九七〇年、児童文学のノーベル賞と称される《国際アンデルセン賞作家賞》を受賞する。こうして、彼の名は世界的なものとなり、イタリア国内だけでなく、各国から講演の依頼を受けるようになる。

冒頭で述べた名著『ファンタジーの文法』は、教育の現場での子どもたちとの触れ合いを通して、自ら確立したファンタジーの技法（彼はこれを「おもちゃ」と呼んでいる）を、レッジョ・エミリアの教師を集めて披露した講演会《ファンタジー学との出会い》の内容を元に書き起こしたものだ。

同書が七三年にエйнаウディ社より刊行されると、「子どもたちが本来持っている創作力を尊重するだけでなく、引き出し、刺激し、発展させるための方法論であり、彼らの創作力を押しつぶし、支配しようというマスメディアや学校、家庭やテレビと

いった、社会全体に共通するあらかじめパッケージングされた環境に対抗するものである」(ロベルト・デンティ)などと高く評価された。

同書の第一章に記されている、「教育の場において、想像力がしかるべき重要性を持つべきだと考える人びと、子どもたちが本来持つ創作力に信頼を寄せている人びと、そして、言葉というものが、どれほど自己を解き放つ価値を持っているかを知っている人びとにとって、本書が役に立つものであることを願ってやまない。《言葉の持つすべての用法を、すべての人に》。これほど民主的な響きを持つ、素晴らしいモットーがほかにあるだろうか。誰もが芸術家だからではない。誰もが奴隷ではないからだ」という言葉からは、教育や言葉に対するロダリーの姿勢だけでなく、子どもに対する深い愛情が伝わってくる。

『ファンタジーの文法』とほぼ同時期に刊行されたのが、本短編集『猫とともに去りぬ』である。邦訳のある『二度生きたランベルト』(一九七八年)もそうだが、これ以降のロダリーの作品には、現代社会に対する痛烈なアイロニーが色濃くあらわれるようになり、子どもには若干、難しいのではないかと思われるものが多い。

『二度生きたランベルト』は、「死」に対するランベルト男爵の恐怖を揶揄した作品だが、同書を執筆していたころから、ロダーリは体調を崩していたらしい。

一九八〇年、動脈瘤の手術のために入院するが、手術の三日後に心不全を起こし、六十歳という若さで生涯を閉じた。自ら編んだ最後の短編集、『陣取りあそび』の刊行を待たずして亡くなったことになる。

お話づくりの名人、ロダーリの早すぎる死は、多くの文学者・批評家に心から惜しまれ、ロダーリが遺した童話、詩、戯曲、エッセイ、短編など、多岐にわたる膨大な作品の再評価につながる。

こうして、死後も、新聞や雑誌に掲載された作品が新たに編まれたり、版を変えたりしながら、単行本だけで七十冊は軽く超える著書が刊行され、いまだに読みつがれている。

ファンタジーという、それまでは理論とは無縁だった領域を、きわめてシンプルで明快な、それでいて高度に洗練された「文法」として世界中の人びとに提示したこと、六〇年代から七〇年代にかけてイタリアの教育のあり方を根本から変えたこと、戦後

のイタリア児童文学の地位を高め、ロベルト・ピウミーニやステファノ・ボルデイリ
オーニらに代表される、現在の多彩なイタリア児童文学が形成されるまでの流れに、
大きな影響を与えたこと……。

ロダリーの功績は数多い。子どもと大人との関係や、子どもの成長における「笑
い」の大切さを説いたことも、そのひとつだろう。

「子どもたちが、笑いながら学べるものを、泣きながら勉強することに意義があるだ
ろうか？ 綴り方を間違えたばかりに、子どもたちが五大陸で流した涙をぜんぶ合わ
せたら、発電所として利用できるほどの滝となるだろう。だが、それでは、あまりに
も犠牲の大きなエネルギーとなってしまう。間違いというものは、パンとおなじよう
に、なくてはならず、役に立つものであり、大方が素晴らしいものである。その代表
的な例が、ピサの斜塔だ」（『まちがいの本』の序文より）。

ロダリーの言葉のひとつひとつに重みがあり、現在の日本の子どもたちがおかれた
環境を改めて考えさせられる。

* * *

本書『猫とともに去りぬ』は、七二年から七三年にかけて日刊紙「パエーゼ・セラ」に掲載された短編を、ロダリー自身が編み、七三年に単行本としてエイナウデイ社より刊行されたものである。

七七年には、同社の中学生向けの読み物のシリーズの一冊として収められているし、九三年には、フランチェスコ・アルタンの挿絵入りで、エイナウデイ・ラガッツィ社より、子ども向けの抜粋版も出ている。

オリジナルタイトルの《*Novelle fatte a macchina*》は、「機械でつくった物語」という意味である。ここでの「機械」は、「タイプライター」と解釈することもでき、すた「廃れる一方の鉛筆」の対極にあるものとして、スピード化された現代社会を象徴する存在である。

オリジナル版には、全部で二十六の短編が収録されている。しかし、邦訳にあたっては、当時のイタリアの人気テレビ番組にワニが登場するという設定の「知ったかぶりのワニ」(*Il cocodrillo sapiente*)など、特殊なイタリア事情・社会情勢を知らないと理解できない作品や、「詩人の戦争」(*La guerra dei poeti*)など、言葉遊びの要素が強く、日本語に訳すことが難しい作品九編と、『マルコとミルコの悪魔なんかこわくない!』(拙訳、くもん出版)の第七話としてすでに収められている *Marco e Mirka, il diavolo e la signora De Magistris* は割愛し、計十六編とした。

『ファンタジーの文法』とほぼ同時期に刊行された本書は、上述したように、ロダリーの転換期にあたる作品である。これまでと同様、おとぎ話的なファンタジーを出発点としながらも、方向性が変化し、現代社会への痛烈なまでのアイロニーが、色濃く感じられるようになってくるのだ。

家族から邪魔者扱いされている定年退職後の初老の男性や、庭師に無理難題を命じる社長、女の子はお人形で遊ぶものと決めつける母親、といった登場人物を、ロダリーは、あたかも映画の撮影を思わせるような、スピーディで簡潔なストーリー展開で

語っていく。人びとの頭に巣くっている既成概念や言葉づかいを逆手にとりながら、ユーモラスに語ることによって、現代社会に対する、強烈な異議申し立てをしているのだ。

ロダーリは、笑いのメカニズムを分析した文章で、次のように述べている。「優越感から生まれる笑い」というものは、気をつけないと、よこしまで陳腐な順応主義と手を結び、保守的な役割を担う危険をはらんでいる。目新しいもの、普通と違うものを笑い、鳥のように空を飛びたがる人や、政治に携わろうとする女性を笑う。みんなと考え方が違う、みんなと話し方が違う、伝統や規則に求められた姿と異なるといっては人を笑うといった、いわゆる反動的な「滑稽」の原点がここにある。笑いがポジティブな役割を果たすためには、その矛先が、旧態依然とした概念や、変えることに対する怖れ、規則に対する妄信に向けられる必要があるのだ。私たちの物語においては、反順応主義的な「ずっこけた登場人物」が成功を収めなければならぬし、当然なことや規律に対する彼らの「不服従」こそが報いらなければならない。世の中を前進させるのは、ほかでもなく、服従を拒否する人たちなのだから」（『ファンタジー

の文法』)。

知的ファンタジーと言葉遊び、そして現実社会へのアイロニーが見事に織りなされた一連の短編からは、ロダリーの人間観や社会観が、ストレートに伝わってくる。

これこそが、ロダリーのユーモアの真骨頂ともいえよう。そこから生まれる笑いは、じつに高尚な笑いであって、物事の本質と向き合うことを、読む者に余儀なくさせる。

『ファンタジーの文法』は、ロダリーの物語創りにおける理論書であるが、本書は、その理論が結実された短編集としても楽しむことができる。まったく関係のないふたつの言葉を組み合わせ、そこからふくらんでゆく新しいイメージを利用して物語を創っていくという《ファンタジーの二項式》をはじめ、《ファンタスティックな假定》、《ファンタジーの対称性》など、『ファンタジーの文法』で挙げられている理論や例の多くが、本書の短編のなかで披露されている。

「もしおじいさんが猫になったら」という假定を、子どもたちに提示し、未完の話を

聞かせる。そして、子どもたちのやりとりを反映させながら生まれたのが、今回の表題となっている「猫とともに去りぬ」である。

結末はどうしたらいいかと子どもたちにたずねたところ、また柵をくぐらせて、おじいさんにもどしてあげるべきだと、ほとんどの子どもたちが答えたそうだと。

《ファンタジーの対称性》がはたらき、ある方向へ向かう魔術的な出来事があると、想像力は知らないうちに、それと反対の方向へ向かう魔術的な出来事が完成されることを期待するものだと、ロダリーは分析している。このアイデアを、ロダリーは気に入っていたらしく、風刺の度合いを多少薄めて、子どもでも楽しめるような形に書き換えたヴァージョン「ネコ星」(La stella Gatto)も存在する。

カウボーイとピアノという《二項式》から生まれたのが、第七話の「ピアノ・ビルと消えたかかし」である。登場人物に普通と異なる属性を持たせると、その属性を利用して、新しい冒険に出会うことができる、ロダリーはそう説明する。

属性を選ぶ場合、気をつけなければならないのは、陳腐にならないようにすることだそうだと。

こうして、たとえばピストルのかわりにピアノをかき鳴らすカウボーイ、ピアノ・ビルというキャラクターが生まれたのである。

ジャンニ・ロダーリのおもな邦訳作品

(出版年の新しいもの順。現在、入手不可能となっているものも含む)

『空にうかんだ大きなケーキ』 よしとみあや訳、汐文社、二〇〇六。

『マルコとミルコの悪魔なんかこわくない!』 関口英子訳、くもん出版、二〇〇六。

(*Storie di Marco e Mirko*, 1994)

『幼児のためのお話のつくり方』 窪田富男訳、作品社、二〇〇三。(*Scuola di fantasia*, 1992)

『二度生きたランベルト』 白崎容子訳、平凡社、二〇〇一。

『ファンタジーの文法―物語創作法入門』 窪田富男訳、ちくま文庫、一九九〇。

『ロダーリのゆかいなお話 1〜5』 安藤美紀夫訳、大日本図書、一九八六〜八八。

(*Venti storie più una*, 1969)

『うそつき国のジェルソミーノ』 安藤美紀夫訳、筑摩書房、一九八五。(*Gelsomino nel paese dei bugiardi*, 1958)

『もしもし…はなしちゆう』 安藤美紀夫訳、大日本図書、一九八三。

『物語あそび—開かれた物語』 窪田富男訳、筑摩書房、一九八一。(Tante storie per giocare, 1971)

『パジヤマをきた宇宙人』 安藤美紀夫訳、講談社、一九七二。

『ジップくん宇宙へとびだす』 安藤美紀夫訳、偕成社、一九六七。

『青矢号のぼうけん』 杉浦明平訳、岩波書店、一九六五。

『チポリーノの冒険』 杉浦明平訳、岩波少年文庫、一九五六。

ジャンニ・ロダーリ年譜

- 一九二〇年
北イタリアのオメリニャに生まれる。
- 一九二九年
父の死。ロンバルディア州のヴァレーゼに転居。
- 一九三七年
師範学校を卒業。
- 一九三九年
ミラノ・カトリック大学外国語学部に入學。臨時教師として小学校で教える。
- 一九四三年
レジスタンス運動に加わる。
- 一九四四年
イタリア共産党に入党。
- 一九四五年
機関誌「ロルディネ・ヌオーヴォ」(*L'Ordine Nuovo*)の編集をはじめ。
- 一九四七年
ミラノで、共産党の日刊紙「ルニタ」(*L'Unità*)の記者となる。
- 一九四九年
同紙の日曜版で子ども向けのページを
- 一七歳
一九歳
一七歳
一九歳
二四歳
二五歳
二七歳
二九歳

- 担当。
- 一九五〇年 三〇歳
ローマに移り、子ども向け週刊誌「ピ
オニエーレ」(*Pioniere*)の創刊に携わる。
最初の詩集『わらべ歌の本』(*Il libro
delle filastrocche*) 刊行。
- 一九五一年 三一歳
『チポリーノの冒険』(*Il romanzo di
Cipollino*) 刊行。
- 一九五三年 三三歳
マリア・テレザ・フェツレットイと結
婚。
- 一九五四年 三四歳
『青矢号のぼうけん』(*Il viaggio della
Freccia Azzurra*) 刊行。
- 一九五七年 三七歳
一人娘のパオラが生まれる。
- 一九五八年 三八歳
日刊紙「パエーゼ・セーラ」(*Passe
Sera*)の執筆協力をはじめる。
- 一九五九年 三九歳
銀行協会の冊子「ラ・ヴィア・ミリオー
レ」(*La Via Migliore*)に作品の掲載を
はしめる。
- 一九六〇年 四〇歳
『空と大地のわらべ歌』(*Filastrocche in
cielo e in terra*)をエイナウデイより刊行。
- 一九六一年 四一歳
子ども雑誌「コツリエーレ・デイ・ピッ
コリ」(*Corriere dei Piccoli*)に作品の掲

載をはじめる。

一九六二年 四二歳

『もしもし…はなしちゅう』(Favole al telefono)、『パジヤマをきた宇宙人』(Il pianeta degli alberi di Natale)、『ジップく
ん宇宙へとびだす』(Gip nel televisore. Favola in orbita) 刊行。

一九六四年 四四歳

月刊誌「保護者ジャーナル」(Il Giornale dei Genitori)の編集・執筆協力をはじめる。

『まちがいの本』(Il libro degli errori) 刊行。

一九六五年 四五歳

『まちがいの本』でアントニオ・ルビーノ賞受賞。

一九六六年 四六歳

『空にうかんだ大きなケーキ』(La torta in cielo) 刊行。

一九六八年 四八歳

「保護者ジャーナル」の責任編集を務める。

一九七〇年 五〇歳

《国際アンデルセン賞作家賞》受賞。

一九七二年 五二歳

レッジョ・エミリアで《ファンタジー学との出会い》(Incontri con la Fantastica) 開催。

開催。

一九七三年 五三歳

『猫とともに去りぬ』(Novelle fatte a macchina)、『ファンタジーの文法―物

語創作法入門』(*Grammatica della fantasia*.)

Introduzione all'arte di inventare storie) 刊行。

一九七八年

五八歳

『二度生きたランベルト』(*C'era due volte il barone Lamberto ovvero I misteri dell'isola di San Giulio*) 刊行。

一九七九年

五九歳

『二度生きたランベルト』がモンツァ賞の最終候補となる。

一九八〇年

六〇歳

四月一〇日入院、同一四日、心不全のため死去。

『陣取りあそび』(*Il gioco dei quattro cantoni*) 刊行。

一九八二年

『ファンタジーの文法』誕生十周年を記

念する会議《ファンタジーが理性と一

緒に馬にまたがったなら》(*Se la fantasia*

cavalca con la ragione) が、レッツィョ・エ

ミリア市で開催される。

一九八七年

オルヴェイエート市に《ジャンニ・ロダー

リ研究センター》(*Il centro studi Gianni*

Rodari) 設立。

訳者あとがき

縁あって、ロダリーの作品を訳させていただいた。この数か月、ロダリーの言葉に囲まれて至福の時を過ごすことができた。職業柄、これまでいろいろな文章を訳してきたが、こんな幸せを感じたのは初めてかもしれない。

しかも、《古典新訳文庫シリーズ》の第一弾として、ドストエフスキーやシェイクスピアとならんでロダリーを取り上げるといふ、日本の常識から考えたら異端としか思えないような決断をしてくださったのは、光文社古典新訳文庫の編集部のみなさんである。この場をお借りして、心よりお礼を申しあげる。

また、私のイタリア語の源であり、いつものことながら、どんなに忙しくてもていねいに疑問を解決してくれた Marco Sbaragli にも、感謝したい。言葉だけでなく、ロダリーを楽しむうえで欠かせないアイロニーとユーモア精神も、彼に教わったような

気がする。

イタリア人は、概して皮肉がうまいし、笑いを大切にしている。これは、ロダリーの教育の成果なのか、それとも、もともとの彼らの気質なのか、私には、いまだに謎である。

この本を手にとってくださった方が、ロダリーの新しい顔を発見し、彼の作品や思想に興味を持ってくださったとしたら、これほど嬉しいことはない。

二〇〇六年七月

関口英子